

棚尾まちづくり事業

平成 24 年 1 月 26 日（木曜日）

第 7 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

- 1 前回までのテーマに関する参考意見など
藤井達吉、棚尾駅、棚尾の瓦屋、加藤平五郎など

- 2 テーマ 13 「江戸時代棚尾村の村勢」
 - (1) 資料説明（杉浦光雄）

 - (2) 出席者による補足説明、感想など

- 3 テーマ 14 「棚尾の郵便」
 - (1) 資料説明（磯貝国雄）

 - (2) 出席者による補足説明、感想など

- 4 連絡事項・情報交換など

- 5 次回日程
 - 第 8 回 2 月 21 日（火曜日）午後 7 時から
「棚尾の食べ物の移り変わり」「棚尾の石碑（前半）」
 - 第 9 回 3 月 28 日（水曜日）午後 7 時から
「棚尾の石碑（後半）」「史跡案内板設置」

江戸時代棚尾村の村勢

一、棚尾村の沿革

棚尾という地名の初出は、「蔭涼軒日録」長享元未年（一四八七）十一月八日の条に「就当院末寺大浜多那和之興聖寺看坊職事」と見える。

当時は大浜村の一部であったようだ。のち、寛永二丑年（一六二五）

大浜村より分村して棚尾村となった。はじめ、岡崎藩領（検地帳・寛

永二丑年改水帳に本多下総守とあり）、正保二酉年（一六四五）西尾藩

領（検地帳に井伊兵部少輔とあり）、万治二亥年（一六五九）幕府領、

元禄年間（一六八八〜一七〇四）旗本松平正久と沼間新五郎の相給、

元禄十四巳年（一七〇一）沼間知行分が幕府領、同十六未年（一七〇

三）全域が幕府領、享保二酉年（一七一七）旗本竹田忠雄と酒井友完

知行と岡崎藩領の三給付、宝暦十三未年（一七六三）幕府領、明和七

寅年岡崎藩領、天明二寅年（一七八二）沼津藩領、明治元辰年（一八

六八）同藩主の転封により菊間藩領。明治四巳年（一八七二）額田県

となる。（角川日本地名大辞典・愛知県）

三、村高

享和三亥年（一八〇三）

七四九戸

天保十二丑年（一八四一）

四七三二人

九五九戸

明治五申年（一八七二）十一月 五八六三人

一二一六戸

正保三戌年（一六四六）

高九百十九石四斗

寛保二戌年（一七四二）

高千二百四十六石四斗四升六合（合計合わず）

三百四十二石九升五合 竹田源次郎

三百四十二石九升五合 酒井安藝守

五百六十四石二斗五升六号 御領

宝暦三酉年（一七五三）

高千二百四十六石四斗（屋敷雑類地を含む）

三百四十二石九斗 酒井安藝守

三百四十二石九斗 竹田源次郎

五百六十石六斗

御領

二、人口数と戸数

宝曆十二年(一七六二)

高千二百四十六石四斗

三百四十二石

酒井大炊頭

三百四十二石

竹田源次郎

五百六十二石二斗

御料

明和七寅年(一七七〇)

高千二百四十六石四斗

反別百二十一町余

三百四十二石

酒井大炊頭

三百四十二石

竹田吉十郎

五百六十二石二斗

御領

寛政八辰年(一七九六)

高千二百四十六石二斗

天明二寅年(一七八二)

高千二百四十六石四斗

三百四十二石

旗本酒井鉄蔵(年内に上ケ知?)

五百六十二石二斗 御領(岡崎藩本多中務大輔上ケ知)

三百四十二石

代官岩松直右衛門 御領(竹田吉十郎上ケ知)

享和元酉年(一八〇一)

高千二百四十六石三斗

天保五年(一八三四)

高千二百四十六石三斗

天保七申年(一八三六)

高千二百四十六石四斗

明治五申年(一八七二)

高千二百四十六石四斗

反別百十九町二反九畝

寛政八辰年の本田畑と、田畑の割合

田 四百五十七石五斗

畑 五百六十五石七斗

田畑の割合 田 四五

畑 五五

但し、新田畑の場合は

田 二十四石五斗

畑 九十八石五斗

四、農民の階級構成

田畑の割合 田 二〇 畑 八〇

水呑の割合 二六

寛保二戊年（一七四二）三給村の内の一

百六十二戸中 本百姓百三十五戸 水呑二十六戸

享和元酉年（一八〇二） 七百四十二戸中 本百姓四百四十三戸 水呑二百九十八戸

水呑の割合 一六

天保十二丑年（一八四二）

宝暦三酉年（一七五三）三給村の内の一

百八十戸中 本百姓百五十五戸 水呑二十五

九百五十九戸中 本百姓四百三十六戸 水呑五百二十三戸

水呑の割合 一四

棚尾村本百姓高別構成（「碧南市史」第一巻）

宝暦十二年（一七六二）三給村の内の一

二百三戸中 本百姓百六十六戸 水呑三十七

嘉永二己酉年（一八四九）

水呑の割合 一八

一石以下 二三五 十石以上 一〇
一石以上 七九 二十石以上 一

明和七寅年（一七七〇）三給村の内の一

二百三十七戸中 本百姓百八十二戸 水呑五十六戸

二石以上 四五 四十石以上 一
三石以上 二四 計 四五〇

水呑の割合 二四

四石以上 二二

天明二寅年（一七八二）三給村の内の一、旗本領と岡崎藩領

四百十八戸中 本百姓三百八戸 水呑百十戸

五石以上 一三
六石以上 五

七石以上 五
 八石以上 六
 九石以上 四

註 水呑百姓五百九十六戸は、本百姓百二十五戸の借地小作として生きてきた。主な地主の小作人は次の通り。

中根又左衛門	五十五戸	山中七左衛門	四十九戸
七十郎	三十一戸	吉右衛門	三十九戸
清八	二十六戸	半十	十八戸
権太郎	十三戸	権七	十二戸
倭兵衛	十八戸	妙福寺	五戸
光輪寺	二戸	西方寺	九戸

五、年貢

正保三戌年（一六四六）「西尾領戌之年免相定書出之事」によると、高八百七十七石五斗九升六合（屋敷を含む）のうち、高内引残八百二十石七斗七升八合。

区分	高内引残	貢租	租率
----	------	----	----

本田	八二一・七七八	三七三・九〇九	〇・四五五
同新田	高四十一石九斗一升四合のうち、高内引残三十七石九斗六合。		
新田	三七・九〇六	一〇・九九二	〇・二九
納合	三百八十四石九斗一合		

外に塩浜役 金三分ト銭七百五十文

宝永七庚寅年（一七一〇）「寅歳可納御年貢割付之事」（御料）によると、

高五百四石三升五合のうち、高内引残四百八十五石五斗二升九合。

区分	高内引残	貢租	租率
本田	一七八・五一	八九・二五五	〇・五
古新田	一九・九三九	七・四七七	〇・三七五
起返田	八・〇一一	一・一二二	〇・一四
山畑	一六八・二六三	二五・二三九	〇・一五
木綿畑	六五・三四	七・一八七	〇・一一
惣作山畑	一七・三三	一・九九三	〇・一一五
出作山畑	一六・八一二	三・一九四	〇・一九

起返山畑 一一・三二四 一・三五九 〇・一二

小以 一三六・八二六

新田高百九石八斗五升三合のうち、高内引残百九石七斗九升

田方 七・八九五 二・五五 〇・三二三

畑方 一〇一・八九五 一一・七一八 〇・一一五

天保五午年（一八三四）「午御年貢可納割付之事」によると、高千二百

四十六石三斗（天保五午年より七ヶ年御定免）

区分 高内引残 貢租 租率

本田 四三九・五八一 一三三・二一六 〇・五三一

本畑 五六七・二八六 一一六・三〇三 〇・二〇五

新田 二四・四六〇 八・三五六 〇・三四二

新田畑 一九八・五〇九 四四・四三七 〇・三四二

其のほか雑税・付加税 米一二石六升九合ト永二貫六十文。

納合米四百十四告三斗八升一合ト永二貫六十文。

文久二戌年（一八六二）「地下免割目録」によると、高千二百四十六

石四斗四升六合のうち、

区分 高 貢租 租率

本田 三九四・五二三 二三二・七六九 〇・五九

古新田 四四・三九七 二五・三〇六 〇・五七

起返田 八・五一九五 二・八一 〇・三三

本畑 四五九・八八八 一〇七・六一四 〇・二三四

古新惣作畑 一〇二・二六九六 二三・九三一 〇・二三四

出起返畑 二二・九四五六 一三・〇七九 〇・五七

新田 一九九・八五六二 五八・五五八 〇・二九三

右のうち本田の租率は高内引^(ママ)せる残高に対する租率となり、全体

の租率は〇・三七となる。

註 「碧南市史」第一巻の棚尾村の明細（P二三六）の表に手を

加えたもの。貢租の計は四百六十四石六升八合、高の計は

千二百三十二石四斗。全体の租率は〇・三七七である。

但し、高から内引きされていないので、これは参考までである。

石盛

田畑の生産性を示す。（一反・斗単位）

上田 十四〇十二 上畑 一三〇十

中田 十二〇十 中畑 十一〇八

下田 十〇七 下畑 九〇六

屋敷は上畑に属す。

坪刈して粃を玄米にすると容積は半分になる。これが石盛の数値となる。

年貢の外にも種々の負担が農民にかかった。その代表的なものが夫役である。なかでも白須賀の助郷役は大変だった。幾度も訴願して金納にしまらったのだが、それに要した金銭や労力は計り知れない。

六、諸産業の動き

①農業

新田の開発

「寅歳可納御年貢割付之事」（宝永七寅年・一七一〇）のなかに「古新田」とあるが、詳しいことは分らない。場所は平岩鉄工所の東辺りで、

旧三河線のところ。高内引後は十九石九斗三升九合。明治の濃尾地震

復旧工事の文書に見られる地名。

同文書には「浜尾新田」の名が見られる。棚尾村のうちの東山・西山である。高は百九石八斗五升三合。高内引残は百九石七斗九升。

人口が多く、農地の不足した棚尾村では、矢作川筋の寄洲に目を向け、新田開発を試みる。

大浜・棚尾の入会である郷前に新田を開発しようとしたが、障害が多く難行した。大浜・棚尾両村と平七村中根又左衛門、伏見屋新田藤次郎らの意見がまとまり、文政九戌年（一八二六）八月着工の許可があり、翌十年五月堤防が完成し、同年十月には地割を行なった。

この新田の反別は百八十三町歩余り。文政十一子年（一八二八）試作を行ない、天保十三寅年（一八四二）上ケ知された。新田の大部分は、歟下年季三年であった。これが前浜新田である。

畑の主作物は綿花である。畑作物として生産性が高かったのは、肥料とした干鯛のおかげである。かくして三河木綿の名声を支えた。

②酒造

今に残る「村明細帳」寛保二戌年（一七四二）には、酒造家として角左衛門・与四右衛門・善兵衛の名がある。角左衛門・与四右衛門の名

は、以降も「村明細帳」に登場する。

「碧南市史」第一巻には、天明八申年（一七八八）酒造家として市左衛門（酒造米二百五十石、以下同じ）・和助（六百石）・角左衛門（千石）・与四右衛門（千石）の名がある。

棚尾村の酒は、大浜港から船で江戸へ運ばれた。

③味醂

これは酒粕をもとにして焼酎を造り、これに糶と糯米を加えて仕込むのである。味醂業は大浜の石川八郎右衛門が安永元辰年に始めたもので、次第に近隣に広まった。但し、「明細帳」には名まえが残っていない。これは味醂造りが農間余業であったせいからだろう。

④味噌・溜

江戸時代中頃には味噌・溜醸造業はあったと思われるが、確かな記録が見当たらない。慶応三卯年（一八六七）棚尾村北組の新六が、味噌・冥加永二百五十文を上納している。

⑤瓦

現在のところ、「村明細帳」（宝暦十二年・一七六二）の庄次郎・庄

三郎が棚尾村で最も古い瓦屋である。だが、現物では豊田市野口町で発見された「瓦屋喜兵衛内金三郎」と刻名のある鬼瓦（天明二寅年・一七八二）が最も古い。喜兵衛の名は「村明細帳」に見られないが、金三郎は当時著名な瓦師であったらしく、各地に秀作を残している。瓦師の中で資料を多く残し系譜もはっきりしているのは左兵衛である。京都風の技術を学んで天明八年開業したと伝えられる左兵衛家の瓦産業の振興に尽くした功績は大きい。

⑥水産業

天保十二丑年の「村明細帳」に「男女共農業間ニ……所々海表ニ而藻草取・投網・洲引漁・蛤取渡世仕候……」とあるが、ほとんどは農間余業といったところであろう。

「碧南市史」第一巻には、安永七年（一七七九）源七が鰻漁を始めたとか、文化六年（一八〇九）和兵衛がやはり川筋で鰻漁を始め、冥加金として一ヶ年銭十五貫文を上納している。ただ、専業の漁業稼は余り多くはなかっただろうことは前述の通りであろう。

⑦製塩業

世に大浜塩というのは、大浜と棚尾でとれた塩のことである。西国の塩に比べ質が劣っていたといわれる。大浜塩は川舟や馬の背に積まれて足助まで行き、ここで西国の塩とブレンドされて、足助塩という名で信州方面に運ばれた。

寛永十四年（一六三三）の塩田の面積は、大浜村・棚尾村合わせて十三町六反八畝二十三歩あり、内訳は大浜村九町三反七畝二十一歩、棚尾村四町三反一畝二歩あった。

天明八申年（一七八八）の棚尾村記録には、塩問屋二戸、塩浜地主三十四戸、小作四十六戸とある。

⑧質屋

古くからある職業で、「明細帳」には、宝暦三酉年（一七五三）一戸加兵衛とある。また、宝暦十二年（一七六二）には一戸嘉平次、明和七寅年（一七七〇）一戸嘉平次、享和元酉年（一八〇二）四戸嘉兵衛・勘次郎・文平・七左衛門、天保十二丑年（一八四二）七戸七兵衛・半兵衛・源左衛門・倭三郎・七左衛門・弥次兵衛・勘治郎などの名が残っている。なかには源左衛門のように為替を取扱う業者も現れた。

時代の趨勢であろう。

七、結び

棚尾村は大村である。他地方の人には理解しかねるであろう。だから大のトラブルが発生している。明治になると積もった不満が一挙に爆発し、分村問題というかたちで噴出した。

第一次が東浦で、明治九子年（一八七六）平七村と合併した。第二次が東山・西山で、同十六末年（一八八三）北棚尾村として独立した。第三次は中山で、明治三十一戌年（一八九八）頃伏見屋村と合併しようとしたのだが、これは失敗に終わった。これらの経緯については日を改めて発表したい。

棚尾の郵便

1 要旨

明治 8 年、棚尾村字源氏の長田半十方に棚尾郵便局が開設された。これは碧南市内で一番早いだけでなく、愛知県下でも 12 番目という大変早い時期に開設された郵便局であった。しかし、明治 13 年に大浜郵便局ができるとそこへ合併移転された。

それ以来、長い間棚尾には郵便局がなく不便であったが、昭和 9 年（1934）字志貴屋敷に集配業務のない特定局の棚尾郵便局が新設され、長田鎮雄が局長になった。戦後は字源氏に移り、其の後、昭和 46 年（1971）には字春日に新築移転し、現在に至っている。

2 創設期の棚尾郵便局

明治 3 年（1870）に新政府は郵便制度の第一歩を踏み出した。同年 3 月以降官営によって郵便制度を東京・大阪間に実施し、次第に全国に及ぼすことにした。こうして同 6 年（1873）に至り、全国的規模のもとに郵便制度が確立された。

（碧海郡誌から抜粋）

我国郵便制度の創設は、維新前の飛脚便に始まり、明治 4 年正月太政官布告を以て飛脚便によるものを取扱う場所及び賃金を一定し、又是と同時に、駅通司より書状を出す心得なるものを発布し、人民をして一定の拠る所を知らしめき。

当時、是を取り扱う場所は古の宿駅にのみ設けられ、本郡においては只、池鯉鮒にのみ設置された。而して是を取扱う場所を名つけて郵便御用取扱所と称しぬ。

同年 12 月刈谷村にも亦、之れを設置せられぬ。当初書状配達の度数は月に僅に五六回に過ぎざりき。其の後、郵便御用取扱所の名を改めて郵便役所と称し、明治 8 年 1 月更に郵便局と改称しぬ。爾来漸く郵便の往来頻繁となるに従ひ、本郡二ヶ所の郵便局にては不便を感ずること少なからざるが故に、更に桜井、棚尾、下中島に是を増設せられ、次で矢作、箕輪、西端、小望、堤に増設せられぬ。明治 13 年棚尾郵便局を大浜に移し、同 23 年 3 月西端郵便局を新川に移し、箕輪、下中島、小望、桜井、堤の郵便局を廃止す。

(碧南市史第二巻から抜粋)

明治8年(1875)1月7日、県令第1号通達により、天王の石川市郎が棚尾村50番戸、長田半十方に、棚尾郵便御用取扱所を新設し、通常郵便事務を開始した。これが碧南における郵便の最初である。この取扱所は愛知県で12番目にできたものである。

同年11月2日には内国郵便為替の取扱いを開始した。明治9年5月には棚尾郵便局と改称し、同11年(1878)9月21日に郵便・貯金事務を開始した。しかるに12年(1879)に大浜町に郵便局設置の請願運動が起こり、翌13年(1880)4月16日より大浜町17番戸藤岡由兵衛方に、大浜郵便局と改称し、棚尾郵便局も合併移転した。

※ 明治19年大浜郵便局が羽根町の岡田好兵衛方に移転した当時の管内図は別添参照地図のとおりである。

3 その後の沿革

碧南棚尾郵便局の資料から

昭和9年5月1日 置局(三等郵便局)

棚尾郵便局 字志貴屋敷21番地 受持集配局大浜局
木造二階建て 52.06 m² 局長 長田鎮雄

昭和16年 種別の呼称変更

三等郵便局という等級制がなくなり、特定郵便局となった。

昭和23年9月1日 移転

字源氏10番地3 受持集配局碧南局
木造二階建て 26.75 坪 局長 長田鎮雄

昭和31年10月1日 名称変更

碧南棚尾郵便局と改称

昭和46年4月12日 新築移転

字春日8番地 受持集配局碧南局
木造二階建て 79.49 m²

昭和48年4月1日 町名変更

春日町3丁目83番地

平成3年10月21日 建替

鉄骨造二階建て 156.77 m²

平成 19 年 10 月 1 日 民営分割化

郵便局株式会社・郵便事業株式会社に移行

種別は窓口局

取り扱い業務は、郵便の受付、貯金、保険及び郵便物販である。

4 郵便ポストの現在位置

現在碧南市には総数 59 の郵便ポストがあり、その内、棚尾地区の位置は次のとおりである。

- (1) 春日町 3 丁目 棚尾郵便局
- (2) 志貴町 2 丁目 妙福寺
- (3) 源氏町 5 丁目 長田歯科 (丸型)
- (4) 棚尾本町 2 丁目 斎藤商店前 (丸型)

※ 以前あった場所

汐田町 八百初前

若宮町 棚尾農協